◆　第三話　　毛谷村六助（けやむらろくすけ）　　（昭和２９年７月２０日掲載）

九州の名高い深山、彦山のふもとの毛谷村という、耶馬渓おくの片田舎に六助と云う若者が住んでいた。

父親に早く死に別れ身体が大きくて気丈母親の手一つで育てられた。六助も又母親に似て十六と云うのに身体も人一倍大きく力も強く、彦山権現の宮相撲にはいつも一番であった。

山仕事から田仕事にかけて、なんでも働き者で、近所の人々から「六助どんは親孝行ででよく働く」とほめられた。母親も無教育な百姓ながら、六助の養育には心掛けていたと見えて、きびしいしつけをしていた。それは六助が近所の寄り事に行っても、行儀が非常に良いからである。

然し六助には誰にも言わないが、一つの大きな望みがあった。
それは剣術の稽古をしたいと言う事である。一かどの武士になると言うような、大それた考えではない。彦山権現で行われた奉納試合を子供のころ見てから、剣術が面白そうであったからだ。

今日も彦山のふもとで、薪取りに余念がなかった。沢山とって帰りかけると、日はとっぷり暮れかけている。あわてて急いで帰る途中で旅の者らしき、白髪の老人に会った。

老人は「もしもし」と六助を呼びとめて「一寸尋ねるが、おまえは剣術が習いたくないか。」とやぶから棒の問いである。六助はまざまざと老人の顔を見ると七十の坂を越した、年寄りであるが、眼光が鋭く人を射るようである。思わず立ちすくんで「ハイ」と答えてしまった。白髪の老人は、「今日は遅いから、翌朝、ここに来るがよい。教えてやろう。」と言った。

六助は嬉しかった。宙を飛ぶようにして家に帰り、一部始終を物語り、あらためて自分の剣術のけいこをしたい念願を述べて母に、ゆるしを請うた。母は叱るかと思いの外「それは良い考えです。この母も大賛成です。お前の体格といい、力量といいこのまま百姓で終わるのは惜しいと思っていました。」

翌朝、六助が悦び勇んで昨日の所へ行ってみると、白髪の老人は火を焚いて、お茶を沸かしていました。「実はわしは急ぐ用があるので、ここに三カ月しか滞在することが出来ない。三か月でわしの秘伝を全部授けたいと思うから、そのつもりでしっかり励んでくれ。」と言われ、六助は、「ええきっとやります。好きな剣術を習うのですから、一生懸命にやります。」と答えた。

それから厳しい修練が始まった。最初から試合である。老人は「どこからでも打ってこい。」

と言った。六助は無茶苦茶に打ちまくるが、そのたびにひらりひらりと体をかわされて、へとへとに疲れた。そうしている内に、力任せに打つ事が無駄であると覚えた時に、老人は「次に型を教えよう。」と言って最初に上中下三段の基本から、天狗上り、つばめ返しの応用に至るまで、噛んで含めるように教えた。熱心な六助はすぐ覚えた。

愈々（いよいよ）三か月の最後の日が来た。その日の早朝、老人は一巻きの巻物を六助に授けた。「わしは、吉岡一味斎だが、わしの秘伝はことごとく授け尽くした。後は暫く自分で工夫するがよい。彦山権現でみっちり修業するがよい。けっして仕官をはやまるな。」と言われた。そして六助親子の厚き礼を受けて、あたふたと何処もなく立ち去ったのである。六助は母親の存命中は百姓の傍ら、剣術の練習を怠らなかったのは、吉岡一味斎の言葉を守っただけでなく、たった一人の母親に孝養を怠らなかったためである。五年の後母親はどっと病床に伏した。枕元に六助を呼んで「よく母の側を離れないで、孝行してくれた。死後は、お前の思い通り充分腕を伸ばしておくれ。」と言い残して、静かに瞑目（めいもく）した。

六助は合掌した。ささやかな葬式を済ませて、天涯孤独の身になった六助は、三年間の喪に服す傍ら、村人を相手に剣術を教えたのである。どこからともなくその手腕が現れて、彦山権現の達人と呼び成され諸々方々から修行の武者が集まるようになった。そうなると諸国の大名から、召し抱えたいとぞくぞく申し込みがあったが、喪の明けるまではと断っている内に、突然思いがけない出来事が降って湧いた。それは或る晩の事、都育ちのみめ美しい一人旅の娘が尋ねてきた。

その娘は恩師吉岡一味斎の娘であってお園と言い、涙ながらの物語に依ると、一味斎は帰国後安心のていで、老後を悠々と花鳥風月を友に楽しんでいたが、不図したいさかいが基で、微塵弾正（みじんだんじょう）と言う、悪者のために闇討ちにあったと言うのである。「あまりの無念さに、母さまはお殿様の許しを得て、一人の兄上と共に仇討ちを申し込んだけど、運つたなくも返り討ち、今はのきわに母さまは彦山権現のふもとの毛谷村六助に万事相談をと言いながら息が絶えました。」と言う。

六助は師の恩を思い出し無念の歯ぎしりをした。「この上は御恩報じに、弾正を討ち取って、お目に掛けましょう。」と勇躍お園を連れて、長年住み馴れた毛谷村を旅立ったのであった。六助お園両人は小倉城外鹿野において、間もなく本懐を遂げて、弾正の首級をあげる事が出来た。それと同時に肥後熊本城主加藤清正に見込まれて仕官をなし、名も木田孫兵衛と改めて、トントン拍子に出世しました。文禄元年（１６８８年）に朝鮮の役起こるや、一方の大将として朝鮮に渡り、花々しい殊勲を立てたが、老境に入るや再び故郷の毛谷村に帰り、九十幾歳もの長寿を保ち、自適の生活を送ったとの事である。（完）

益永嘉之画